

多様な市民活動をする団体や市民の力を「観光」でひとつに！ (こだいら観光まちづくり協会)

背景

「応募用紙出しにきました。」「チラシ置いてもらえませんか？」開けっ放しにした事務所の入口から、ひっきりなしに市民がやってくる。市民との距離が近いこと。これが小平観光まちづくり協会（以下、「協会」）の特徴の一つと言えよう。

小平市においては、①協会の設立以前から活動していた複数の市民団体が協会へ統合・再編されたこと、②「観光」というキーワードで行政の地域活性化への活動が繋がっていること、③その活動を市民のボランティアが支えていること、これらが特徴である。市民の思いを生かした観光まちづくりの事業運営のあり方は、他の都内観光協会の活動の参考になると考え紹介する。

設立の構想・準備から始まる市民の巻き込み

協会は平成 28 年に設立された。都内の観光協会では比較的后発だ。ここ 10 年で設立された観光協会は、いわゆる観光業（宿泊業、商業施設など）が集積していない地域に多い。そのような地域は、「観光」に何を期待するか、いうならば、「観光」でこの地域において何をしたいのか、を明確にした上で設立している※¹。



小平市の場合は、平成 26 年に策定された小平市観光まちづくり振興プラン（以下、「プラン」）が協会設立の端緒となった。そこでは、『住み続けたい、訪れたい』の観光まちづくり』を基本理念とし、基本方針3本柱の一つとして「市民が安心して暮らし」（下線、筆者追記）、来訪者が快適な時間を過ごせる観光まちづくり」を掲げている。そして、このプランは「住みつづけたい」「市民」にも向けたものである。新たに観光推進団体が必要か否かの議論にまず2年。プランに記載された「仮称・小平観光まちづくり連絡会（こだいら観光まちづくり協会の前身）」を設立するための準備会※²にさらに2年。実に4年間の準備期間を経て「こだいら観光まちづくり協会」は設立された。

この4年間とはいたずらに時が流れたのではなく、組織作りのための合意形成と、観光まちづくりに関する機運を高めるための、いわば「熟成」期間であった。プラン検討委員会や準備会は、観光まちづくりに関する団体及び事業者の代表（JA や商工会）、行政、公募市民委員をもって構成され、また、プラン策定過程において、市民がまちの誇りと思うものは何か等市民に向けたアンケート結果をもとに作られたため、市民にとっては「自分ごと」として違和感なく受け止められている。また、市民であれば誰でも参加し意見交換ができる「プチ田舎会議」やシンポジウムやイベントの参加など、市民が関わることで

きる機会が多数用意されていた。その結果、観光まちづくりが一部の人のみで進められるのではなく、広く市民、事業者、関係団体、行政等とともに進めるべきものである、という共通認識ができあがったという。4年間かけてゆっくりと小平の観光に何を求めるか、観光まちづくりをどう行うか、みんなで合意形成を図っていった、これが市民や市民団体との距離が近い理由の一つであろう。

※¹ 北区観光まちづくり協会（平成 29 年）、稲城市観光協会（平成 30 年）、武蔵村山観光まちづくり協会（令和 2 年）等。

※² 観光まちづくりアドバイザー事業を活用（アドバイザー：清水慎一氏）

全庁的な理解

合意形成が必要なのは市民だけではない。「（仮称）小平観光まちづくり連絡会」設置にむけた検討報告書」（平成 27 年小平市）によると、課題の一つとして「組織づくりのためには、市内事業者や市民だけでなく、連絡会設立にむけた庁内の合意形成も重要である」点があげられており、市（役所）は、観光の所管部署だけではなく、観光まちづくりの考え方に対して全庁的な理解・合意を得ることを目標にし、苦心していたことがうかがえる。

現在、協会事務局長の出口氏は当時を振り返って、このように言う。「人口減少を迎える中で、小平市の産業振興は市内だけの交流では限界を迎えていた。外からの交流＝観光の力を使って、それをいかに地域活性に活かすかが課題だった」。プランの検討委員会立ち上げ当時、小平市役所市民生活部の部長であった出口氏は、市民の暮らしや生活、産業振興全般を見渡す中で、「観光」が全ての部署を結び付けるキーワードになり得ると考えた。つまり、小平市内の商業・農業、各種 NPO 活動、市民のスポーツ・レクリエーションや自治会など、市内で「働くこと」や「暮らすこと」、「日々の生活を充実させる活動」すべてが「観光」の力でますます発展することが可能である、と。その考えが 4 年間かけて市民だけでなく、市役所全体にも理解され、市民・行政ともに、小平の観光まちづくりのベースとなり、今に至っている。

既存の市民団体との合併

協会の事務局は 3 人からスタートしたが、設立 3 年目の平成 31 年に大きな出来事を迎える。小平市で活動する 3 つの市民団体である、①グリーンロード※³推進協議会（平成 10 年設立）、②ブルーベリー協議会（平成 20 年設立）、③観光農業協会（昭和 54 年設立）の事務局機能が、市から協会へ移管されてきた。それにより事務局の人員体制が 5 名に補強された他、協会の活動を支える会員数、サポーター会員数も倍増した。



※³ 小平グリーンロードは、玉川上水、野火止用水、狭山・境緑道、都立小金井公園を結ぶ小平をぐるりと一周する約 21 キロメートルの起伏の少ない水と緑の散歩道。平成 16 年に「美しい日本の歩きたくなる みち 500 選」（国交相等）に認証され、平成 27 年には「新日本歩く道紀行 100 選「水辺の道」」（特定非営利活動法人新日本歩く道紀行推進機構）に認定された。

例えば、グリーンロード推進協議会では狭山・境緑道花街道ボランティア部会、あじさい公園ボランティア部会等5つの部会にそれぞれ市民ボランティアが所属し、清掃活動、草花野草の保護育成活動、イベントなどを実施してきた。市民が大事に守り育ててきたボランティア活動が、観光まちづくりの活動の一端として組み込まれたのだ。

<各年の3.31時点の会員数>

会員種別	平成29年	平成30年	平成31年	令和2年	令和3年
団体	46	47	47	48	47
個人	21	23	23	64	64
賛助	0	1	1	14	25
サポーター	0	2	2	42	63
合計	67	73	73	168	199

※ 団体・個人・賛助は有料、サポーターは無料の会員（ボランティア）である。（令和2年度事業報告書より作成）

市民が大事にしてきたものを「観光」がコーディネートする

「こだいらオープンガーデン」は、緑と潤いのあるまちづくりを目指して、個人の庭等を一定期間公開する事業である。グリーンロード協議会の事業として平成19年にスタートし、観光まちづくり協会の事業として引き継がれ、14か所だった登録件数は27か所へとアップしている。オーナー同士で見せあったり競いあったり、訪れた人との交流を楽しんだりすることでコミュニティ活動の潤いと地域活性を図るだけでなく、日英の地図付きパンフレット※4を作成し外国人観光客向けの観光資源開発へとつながった。このことは、日々の生活を充実させたり質を高めたりする取組みから、それを他の人と共有したい・わかちあいたい・見せたい、という気持ちが生まれる、いわば、暮らしそのものが観光資源開発の素地となることを表している。

このように、既存の市民活動を観光まちづくり協会の活動として組みこみ、そこに「観光」という市内外との交流をキーワードに設けることで、よりパワーアップした事業展開が可能となっている。



※4 観光まちづくり助成金（（公財）東京観光財団）を活用

さまざまな市民による観光の関わり

協会のメインの活動の一つとして、「まち巡りガイド養成講座」と彼らによって定期的に行われる「まち巡りツアー」がある。自分たちが暮らすまちのことをもっと深く知りたいという思いで地域を調査し、整理することを通してできあがった資料は、観光情報発信の重要な基礎資料となる。現在までに「まち巡りガイド」33名が登録され、17のコー

スが設定されている。



それ以外にも、「観光まちづくり大使」を任命し、協会のyoutubeチャンネルで小平の魅力について語る動画を配信している。また、市内の大学生が発案した「地域宣伝隊コダレンジャー」として活躍するのも登録した市民ボランティア。さらに、協会のInstagramは、近隣の福祉施設に季節折々の写真を提供する市民サークル「こだフォト部」から写真を提供してもらい運営するなど市民の関わり方はさまざま。

持続可能な観光地経営へ

観光は来街者にむけた「ソト」向きの活動として見られがちだが、日々の生活を充実させるための「ウチ」向きの活動の側面も実は強く、その活動を担ってきた団体や市民と協働することの意義もまた大きい。本事例は、全ての市民にとって、観光に様々な関わり方があることを実感し、身近なものとして感じられるに至った過程と、そのことが、地域・住民の観光まちづくりの理解が促進につながることを示している。これらは今後、持続的な観光地経営を推進していくためにも有効な手立てといえよう。

おわりに

観光が主たる産業ではない地域にとっての観光協会の組織の在り方として、小平市のように域内団体の「統合・再編」、市民の参画・連携強化という方法は参考になると考えて、紹介させていただきました。とはいえ、それは簡単ではなく、小平市が再編成できたのも、もともと市民生活部 産業振興課（現在は、地域振興部へ名称変更）が、商工会・JAや各協議会などの市民団体を同じ部署で所管していたため、考え方や方向性のすり合わせが比較的容易であったことや、グリーンロード協議会^{※5}、観光農業協会^{※6}も、以前からシティセールスを意識した活動をしていたこともあり、「観光」に対しても抵抗が少なくなかったという特殊性があったことも追い風となったと考えます。

しかし、準備会時に立ちあげて今なお実施している、だれでも参加できる「プチ田舎会議」では、市民から企画のアイデアを得たり、今後の協会がめざす姿を共有したりしていますが、そのようなやり方は他の観光協会にもヒントになるのではないのでしょうか。そんな場をつくることに、域内で活動する市民団体や市民との協働のきっかけはあるかもしれません。

^{※5}市の伝統行事と観光資源が一つとなった市を代表するイベント（灯りまつり）の実施なども行ってきた。

^{※6}団体名が表しているとおり、昭和54年という早い時期から、農業と観光をつなぎあわせた活動を行っていた。ブルーベリー栽培発祥地である小平は果樹園での「果物狩り」を観光資源として捉えていたと推察される。

（地域振興部 観光インフラ整備課 本間）

【取材協力先】 一般社団法人こだいら観光まちづくり協会 事務局長 出口拓隆 様

【取材日時】 令和3年12月2日

【関連リンク】 こだいら観光まちづくり協会

URL : <https://kodaira-tourism.com/>

【参考 図書】

- ・小平観光まちづくり振興プラン（平成26年3月、小平市）
- ・「（仮称）小平観光まちづくり連絡会」設置にむけた検討報告書（平成27年2月、小平市）
- ・令和2年度事業報告書（令和3年5月28日総会資料より、こだいら観光まちづくり協会）